

3-6 漁業の歴史

琵琶湖で漁業が始まったのは縄文時代だと考えられており、弥生時代には人々は水路や水田に遡上してくる魚を獲っていました。中国大陸から伝わったと言われている「エリ」をはじめ、琵琶湖の伝統的な漁法の多くは、魚がやってくるのをじっと待つという共通点があり、「待ち」の漁法と呼ばれています。

1. 琵琶湖での漁業の始まり

琵琶湖では、縄文時代にはすでに漁業が行われていたと考えられています。それは、縄文時代の遺跡である石山貝塚や粟津貝塚から魚の骨や貝殻が多く出土しているためです。その後、弥生時代には水田稲作が発達し、コイ科魚類にとっての生活場所や産卵場所を拡大させました。エサとなるプランクトンが豊富で外敵のいない水田は、魚にとって格好の産卵場所となりました。人々は産卵のために水田や水路に遡上してきた魚をヤナなどの仕掛けを用いて獲っていました。水田や水路での魚獲りは、「おかずとり」とも呼ばれ、ごく最近まで行われていました。

2. 半農半漁

琵琶湖の漁業は専業が少ないのが特徴です。滋賀県は昭和30年頃まで純農村部が大部分を占め、琵琶湖周辺では半農半漁で暮らしをたてている家が多く、専業は沖島、堅田など漁業の盛んなところだけでした。琵琶湖の漁業はその広さと資源の関係から大規模漁業の存立は不可能であり、規模の小さい兼業漁業にならざるを得ませんでした。このような漁業形態が琵琶湖のスケールには合っており、それが琵琶湖の魚介類資源を長く守ってきました。

3. エリ

琵琶湖を代表する伝統的な漁具である「エリ(鰯)」の語源は、「入り」がなまったものだと考えられています。エリは湖岸から沖合にかけて遠浅の湖底に竹の柵を打ち込んで、魚が一度入ったら出られない仕掛けになっています。後にエリは高度に発達し、「エリ師」と呼ばれる専門技術者の集団がその設営を請け負うことになります。

4. 待ちの漁法

エリやヤナ、タツベやウエなど、琵琶湖で行われている伝統的な漁法の多くには、人が魚を追いかけて捕まえるのではなく、魚がやってくるのをじっと待つという共通点があります。つまり、魚が移動しなければ成立しない「待ち」の漁法なのです。「待ち」の漁法が発達した理由は、狙う魚の多くが沖合から岸边へと大量にやってくるという生態を持って

いたことに加え、農業などと兼業であっても可能であったことなどが考えられます。また、「待ち」の漁法はシンプルで原始的な漁法ですが、魚たちを獲りつくさない漁法としてすぐれたものでした。



図3-6-1 明治期に描かれたエリの図
「滋賀県管下近江国六郡物産図説—滋賀郡・栗太郡」（滋賀県立琵琶湖博物館所蔵）

5. 多彩な琵琶湖の漁具

琵琶湖では長年の経験工夫から、種々の漁具が生み出されてきました。他府県の内水面漁業では、多くても10数種類にとどまりますが、琵琶湖では40種類以上の漁具のほとんどが、近年まで用いられてきました。これらの漁具は、海洋の沿岸漁業で用いられているものと比べて、大きさ、形の違いこそありますが、原理的には変わりなく、沿岸漁業で用いられている漁具のほとんどすべてのものを琵琶湖漁業の中でひろい出すことができます。こういう点では、さながら日本の沿岸漁業の縮図といった感があります。琵琶湖の漁具は、漁業の歴史を考える上でも貴重な資料であるため、「琵琶湖の漁撈用具及び船大工用具」として平成30年に国の登録有形民俗文化財に登録される予定です。

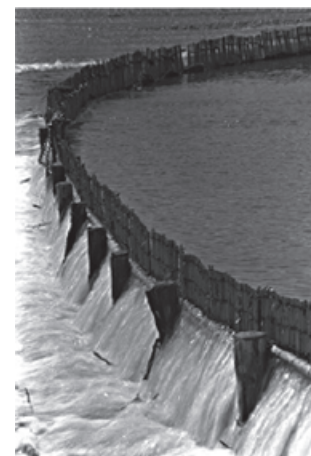


写真3-6-1 安曇川のヤナ
(1959年、前野隆資氏撮影)

【引用文献】

- ・「びわ湖生物資源をめぐって」(びわ湖生物資源調査団編, 1966)
- ・「琵琶湖 その自然と社会」(「琵琶湖」編集委員会編, 1983)
- ・「滋賀県の伝統食文化 滋賀県伝統食文化調査報告書 平成6年度～平成9年度」(滋賀県教育委員会文化財保護課編, 1988)
- ・「ふなずしの謎」(滋賀の食事文化研究会編, 1995)
- ・「びわ湖から学ぶ 一人々の暮らしと環境—」(滋賀大学教育学部附属環境教育湖沼実習センター編, 1999)

滋賀県水産試験場 菅原 和宏